

## 物語の中での「信」と「知」

——トマス・アクイナスの信仰論を手がかりに——

桑原直己

### 〔1〕序 「世紀末をこえて」——物語的な「信」と「知」——

まず「世紀末をこえて」というシンポジウムの副題により、提題者には20世紀に対する何らかの反省的視点を提示することが求められていると思う。いうまでもなく20世紀は科学の世紀であり、現代的科学知の「光と影」については様々な角度からの論及が可能である。私としてはここで、現代科学にいたるまでのいわゆる「近代知」について、これが普遍的な確実性を標榜する結果「遠近法を排除した知」という性格をもってきた点を指摘したい。「遠近法」とは各人のパースペクティブ、つまりは各人一人一人の「物語性」を意味する。そして、近代知はこれを捨象することの上に成立してきたように思われる。

しかるに、人間の生の意味は、その物語的な文脈に即した形で展開する。特に宗教的な意味での「信」および「知」は、人間の生の物語的な意味の全体性にかかわることがら、いわゆる「究極的関心」

について、当人の人生物語の最も根源的・決定的な場面において成立する。「究極的関心」とは「絶対的なもの」への関与を意味し、最終的には時代・地域の制約を超えた絶対的・普遍的な「知」を志向する、ともいえよう。しかし、その「知」は近代知のような遠近法をもたない知ではなく、普遍的でありながらも個人の物語的な文脈の中で成立する、というきわめて特殊な性格をもった「知」であるように思われる。本提題では、そうした意味での「信」と「知」の成立する「場」について、トマス・アクイナスの「信仰」*fides*に関する所論から手がかりを求めつつ私見を展開してみたい。

### 〔2〕トマス・アクイナスにおける信仰の対象——「第一真理」——

いうまでもなく、トマス・アクイナスにとって「信仰」とはキリスト教の信仰を意味する。だとすれば、信仰の対象、つまり「何を信じるのか」という問いに対する答えは一見自明と思われる。つまり、それはキリスト教の「信仰簡条」*articuli fidei*であり、その内

容は教会によって「信条」 *symbolum* として提示されているところではないか。

しかし、「信仰の対象」についてのトマスの所論はそう単純ではない。「信仰簡条」は、さしあたり一定の命題の形をとっている。しかし、トマスによれば、信仰の対象が「或る複合的なもの」、つまり命題の形をとるものであるのは「信じる者の側から考察される場合」という留保のもとでのことである。つまり、それは「複合し、分割する」ことによる人間知性に固有な認識の仕方即してのことである。これに対し、「信じられている事柄自体 *res ipsae* の側から考察される場合」、信仰の対象は或る非複合的なもの、即ち「第一真理」 *veritas prima* である、という。第一真理とは神性 *Divinitas*、つまり神そのものである。

第一真理、即ち神そのものが信仰の対象であるということの意味について、トマスは次のように解説する。即ち、第一真理が信仰の対象であるのは、まず「対象の形相的根拠として」である。トマスによれば、認識一般の対象について、「質料的对象」 *materiale objectum* と「対象の形相的根拠」 *formalis ratio objecti* との二つの要素が含まれている、という。トマスは幾何学を例にとつて説明している。即ち、幾何学において、質料的对象とは諸々の結論（諸定理）であり、形相的根拠とは論証中項である。ここから、信仰において、第一真理たる神が「対象の形相的根拠」であるということとは、幾何学における論証中項に対応する役割を果たしていることを意味する。他方、「信仰簡条」において命題の形で提示される諸々のことからは、信仰の「質料的对象」であり、幾何学における諸結論に

対応する。ただしこれらのことがらも「神にたいして何らかの関係をもつかぎりにおいて」つまり、神の何らかの働きかけの結果として人間が神において喜び想うこと *deum frui* へと向かうように扶助されるかぎりにおいて「のみ」信仰の対象となる、とされ、この意味でも第一真理たる神が信仰の本来的な対象とされる。

では、第一真理を対象の「形相的根拠」として信じる、ということとは具体的にどのようなことなのか。トマスによれば、それは「聖書において明示された第一真理から出てくる」ところの教会の教えにたいして、不可謬にして神的な規準 *regula* にたいするよう「承認を与える、ということである」。

以上のトマスの所論を表面的にまとめるならば、「信仰」とは「信仰簡条」として命題の形で提示されたことから（質料的对象）を、聖書と教会に神（第一真理）の權威を認めることによつて（形相的根拠）信じることである、と要約されよう。しかし、こうしたまとめ方は誤りではないとしても平板に過ぎ、トマスの真意をも損なうように思われる。

### 【3】「信仰」の物語的・共同体的性格

ここで、そもそも「信仰簡条」とはいかなるものなのか、という点に注意を向けてみたい。トマスは、「信仰簡条」とは命題の形をとるもの、と認めていた。しかし、より正確には、単なる命題というよりは、一個の「物語」、つまり一連の出来事の経緯の説明という形をとっている、というべきである。「信条」も、基本的には「イエス・キリストについての物語」の形式を備えている。そして、そ

の「物語」は教会という共同体を反映したものである。周知のごとく古代キリスト教会は公会議を繰り返して、異端に悩みながら、教義の確定に向けての血のにじむような努力を払った。これも、ひとえに教会が同じ信条、つまりは同じ一つの物語を語り継ぐ、一つの共同体であろうとした努力の現れであった。「信条」には、そうした共同体の一性をめぐる歴史が込められている。

教会は本質的にこうした「イエス・キリストについての物語」を語り継ぐ共同体である。この点は、教会の原点である「ケリユグマ」、すなわち初代教会の宣教以来、貫いている。「ケリユグマ」については以下の三つの基本性格を備えた物語であることが指摘されている。第一に、それは、単に過去の人物としてのみならず、「死者の中から復活」のゆえに現在と未来にわたり存立するイエス・キリストについて物語る。第二に、ケリユグマはイエス・キリストに加えて、イエス・キリストの生涯において示された神の働きについても語る。第三に、それはイエスの行為についてのみならず、また目撃者、証人の応答についても語る。その中には、ケリユグマを告げ知らせる当人、つまり物語の語り手自身も含まれている。多くの場合、神が彼らを「証人として」選んだ、ということのゆえに、物語の語り手自身がこの物語の一部となる経緯についても語っている。信仰とは、教会共同体がこのように語り継いできた「物語」について承認を与えること。その物語を神による啓示として承認を与えること、なのである。そして、信仰によって「イエス・キリストの物語」を受け入れることにより、その人自身が「物語」を語り継ぐ共同体の新たな一員となつてゆくのである。

ここで、信仰の対象の「形相的根拠」が第一真理である、ということは、「聖書において明示された第一真理から出てくるどころの教会の教えにたいして、不可謬にして神的な規準 *regula* にたいするよう」に承認を与えることだ、というトマスの言明の真意はより明らかになったと思う。つまりそれは、信仰者は、「イエス・キリストの物語」を語り継ぐ聖書と教会共同体のうちに神の働きを認め、これを受諾する、という意味なのである。そしてその「物語」を承認することによって、人は自ら教会共同体の一員に加わり、キリストと結ばれ、神において悦び憩うことへ向けて導かれるわけである。

#### 【4】「信じる」という行爲

信仰の行爲である「信じる *credere*」ということの意味については、トマスはアウグスティヌスの権威に従い、これを「承認を与えつつ思いめぐらすこと」*cum assensione cogitare* である、と規定している。この規定は、一方では「知」としての明証性をもつ「知識」*scientia*「知解」*intellectus*と、他方では明証性を欠いた「懷疑」*dubitatio*「臆見」*opinio*等と境を接する「信」の中間的性格を示している。

すなわち「信じる者」*credens*は、「承認」*assenso*と「思いめぐらし」*cogitatio*の両方を持つ。「承認」つまり「あれかこれか」のうちの一方の側への「確固とした固着」*adhesio firma*を含む点で、信じる者は、知っている者、知解する者と合致する。他方、彼の認識は明証性の点で明白な直視によって完成されていない、という点で、信じる者は疑う者、臆見をもつ者と合致し、その限りでは

「思いめぐらす」のである。

では、彼の認識は明白な直視による「知」としての明証性を有していないにもかかわらず、何故「承認」がなされるのであろうか。それは、魂の全ての能力を動かす意志の働きによるものである。信仰における承認は、単なる知性の働きではなく、意志の強い介入による承認である。

### 【5】信仰の承認における受動性

しかし、トマスは「信仰」の承認は信仰者の意志の力による、としつつも、その承認は信仰者自身にとつてきわめて受動的な性格をもつ点を指摘する。

トマスによれば、信仰には二つのことが必要とされる。その一つは人間にたいして信すべきことがら *credibilia* が提示されることであり、もう一つは提示されたことがらにたいして信じる者が与える承認である。

信すべきことからの提示は、使徒たちや預言者たちにおけるように直接的に啓示される場合もあるが、多くの場合、信仰を説教する者たち *praedicatores fidei* との「出会い」によって与えられる。つまり、それは上述の「イエス・キリストについての物語」を語り継ぐ「共同体」に何らかの形で出会うことによつてなされる。これはいわば当人の人生の物語において働く撰理的・運命的な導きであり、神の側からの働きかけである。

他方、人間が与える承認に関しては、二重の原因を考えることが可能とされる。その一つは外部から誘導する原因、たとえば目撃さ

れた奇跡、あるいは信仰へと誘導するために人間が行う説得 *persuasio* である。先に信仰の承認は意志による、と指摘したが、それは決して盲目的になされるわけではない。こうした形でそこに「神の働き」があることを示唆する「徴」が与えられるわけである。しかしトマスによれば、これら外的な誘導は、いずれも充分な原因 *causa sufficiens* ではない。というのも同一の奇跡を目撃し、同じ説教を聞いた人々のうち、或る者は信じるのに、或る者は信じないからである。この相違が生じる原因は、当人の内面の問題であり、外部の人間からは伺い知れない。

そこで、信仰における承認にはもう一つの、内的な原因が求められなければならない。さしあたり、それは当人の自由意思の中にある、と考えられよう。しかし、トマスによれば、承認のこの内的原因を純粹に自由意思「のみ」に求める立場（ペラギウス派）も誤りだ、という。トマスによれば、この時「承認へと傾かしめる何か或るもの、つまり人間精神に神から注がれた信仰の性向 *habitus*」がある」という。この性向は知性を通して動かすのではなく、むしろ意志を通して動かすのであり、それは、信じられたことがらを見る（知る）ようにさせるのでもなく、また承認を強いるのでもなく、かえって、自発的に承認させるのだ、という。

つまり、信仰の承認にあたっては、信仰者自身の思いをも超えた神自身に由来する何か、が働いており、しかもそれは信仰者の自発性の根柢となっている、というわけである。それが何に由来するかは、究極的には当人にも伺い知れない、ということになる。トマスによればそれは「聖霊の恩恵 *gratia*」の働きによるのである。

## 【6】神とのドラマ

ここで、いたずらに事態を神秘化して捉えることを避けるために、当人の人生という物語の脈絡の中での神とのドラマ、という視点で物事を見るべきか、と思う。

成人で新たに洗礼を受けて教会に加わる人は、おそらく、自分がいかにして教会に来るようになったか、を語ることができよう。彼は、自分が教会に対する反撥や偏見を捨てて、教会の側に立とうと決心するまでに至ったプロセスを語ることができようであろう。このように彼らが語ることができることの幾分かは、先の「外部から誘導する原因」から説明、理解が可能である。また、幾分かは、当人の自由意思に属することがらとして、当人自身にとってその意味が明証的であるかもしれない。

しかし、これらは彼らの中に起こった志向的・主観的なできごとすぎない。問題は、彼の人生の物語の全体において、彼が受諾に至ったことの客観的意味である。これは教会共同体との出会いを端緒として、当人の人生の物語の全体において働いているのであって、当人自身にもその意味は十全に見えていないはずである。おそらくトマスはこれを「聖霊の恩恵」と呼んでいるのだと思う。しかし、その意味が当人自身に幾分か伺い知ることができるような瞬間が、おそらくはあるかもしれない。それは、当人にとって「己れと神とのドラマの中に働く」「神性」がなにがしか「見える」瞬間、つまりは「知解」される瞬間であろう。「知解を求める信仰 *fides quaerens intellectum*」という伝統的なモットーが示唆してきた「知」は、そ

うした人生の意味の全体性にかかわる物語的な文脈の中で啓きされるような「知」なのではなからうか。そしてそうした「知解」を目指して、人生全体を神とのドラマ、それも、現在進行中で当人には全貌の見えないドラマの中に生きる、ということが「信仰」の意味であるように思われる。

## 【7】結語

世紀末にあたり、「近代知」の目指してきた方向とは別に、上に述べてきたような人間の生の物語的な場面にたった「知」、あるいはそうした「知」に導く「信」の意味が改めて注目されるべきではないのか、という指摘をすることによって、「信と知のゆくえ―世紀末をこえて―」と題する今回のシンボジウムの提題者の責を果たしたごととしたい。

## 註

(1) *Summa Theologiae* (S.T.) II-II, q.1, a.2

(2) S.T. II-II, q.1, a.1

(3) S.T. II-II, q.5, a.3

(4) たとえば、以下に引用する「ニケア信条」においてこの形式が備わっていることを確認されたい。

「れわれは信ず、全能の父、すべての見えるものと見えないものの創造主である神を、神の子、われわれの主イエス・キリスト、すなわち父の本性より神のひとり子として生れ、神からの神、光からの光、まことの神からのまことの神、作られずし

て生れ父と同一実体である。天と地にあるすべてのものはかれによって造られた。われわれ人間とわれわれの救いのために下り、受肉し人となり苦しみ、3日目に復活し、天に昇って、生者と死者を裁くためにくるであろう。

また聖霊を（われわれは信ず）。」

（デンツィンガー・シエンメッツァー編 A・ジンマーマン

監修 浜寛五郎訳 『カトリック教会文書資料集』(D.S.)125)

この点は「コンスタンチノープル信条」(D.S.150) などにおいても同様である。

(5) たとえば、以下に引用する『ローマの信徒への手紙』(1:11-13)におけるごく簡潔なケリュグマの定式においてすら、これらの基本性格が見て取られることを確認されたい。

「キリスト・イエスの僕、神の福音のために選び出され、召されて使徒となったパウロから、……この福音は、神が既に聖書の中で預言者を通して約束されたもので、御子に関するものです。御子は、肉によればダビデの子孫から生まれ、聖なる霊によれば、死者の中からの復活によって力ある神の子と定められたのです。この方が、わたしたちの主イエス・キリストです。わたしたちはこの方により、モーセと預言者からの律法のために、恵みを受けて使徒とされました。」

(新共同訳)

その他、『使徒言行録』(10:36-42) などの例も参照。

(6) S. T. H. II, q. 2, a. 1

(7) S. T. H. II, q. 6, a. 1